

病害虫発生予察特殊報 第 1 号

害 虫 名 トマトサビダニ

Aculops lycopersici (Masse)

1 発生経過

平成 12 年 8 月上旬、中信地区の施設栽培ミニトマトで、茎が地際部分から上に向かって褐変し、葉が枯死する症状が発生した。野菜花き試験場で実体顕微鏡により検鏡したところ、被害部分からトマトサビダニを確認した。

本種は昭和 61 年に沖縄県の施設トマトで初確認された。その後西日本から東日本へ分布が拡大し、平成 3 年には愛知県、平成 4 年には静岡県、平成 6 年には埼玉県、神奈川県、平成 7 年には東京都、栃木県、平成 8 年には群馬県、平成 11 年には山梨県、新潟県などで発生が確認されている。

2 発生状況

発生ほ場は、周囲を水田に囲まれたミニトマトと大玉トマトの 2 棟のビニールハウスで、面積は合わせて 6 a。ミニトマト栽培ハウスでの茎の褐変症状は 7 月中旬頃から見られ始め、その後急激に拡大した。8 月上旬には、本種の発生はハウスのほぼ全面に拡大し、茎が褐変する症状が数十株で見られた。発生の激しい株では葉が枯死し、収量と品質が低下した。

大玉トマト栽培ハウスでは茎の褐変症状は見られなかったが、ハウス全体で本種の発生が見られた。

3 形態及び発生生態

(1) 形態

雌成虫の体長は 0.15~0.18mm、体幅は 0.05mm、雄は雌よりやや小さい。体型はくさび形で、体色は淡黄色である。小型のため肉眼での観察は困難である。卵は円形で半透明である。

(2) 寄主植物

トマト、ナス、ジャガイモ、トウガラシ、タバコ、ペチュニア等のナス科植物

(3) 生態

本種は寄主植物地上部のすべての部位に寄生する。卵から幼虫、若虫を経て成虫になる。温暖乾燥を好み、好適条件下 (26.5℃、湿度 30%) では、6~7 日で卵から成虫になり産卵を始める。

休眠は確認されていないが、第 2 若虫は 1.1℃で約 10 日の生存が認められているので、施設内での越冬は可能であると考えられる。

農薬に対する感受性は高い。

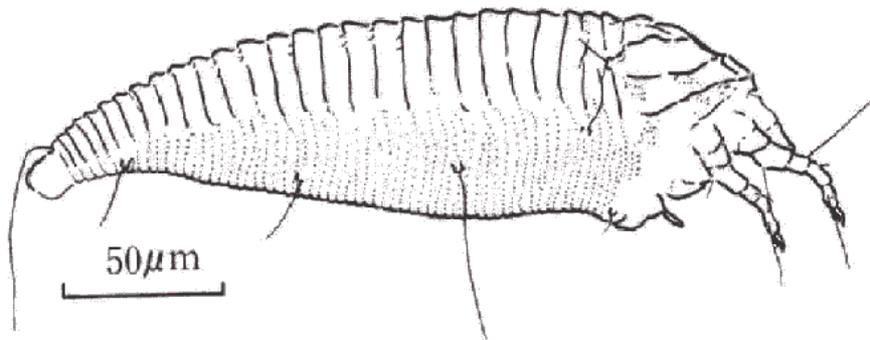
4 被害

本種はトマトの葉、茎、果実に寄生し吸汁加害する。被害は下位葉から始まることが多く、被害葉は葉裏面が光沢をおびた褐色となる。多発すると茎も褐変し、寄生は上位葉に広がり、果実では表面がサビ状になり褐変することがある。激発すると生育不良となり、下位葉から枯れあがり株全体が枯死する

こともある。

5 防除対策

- (1) 県外からナス科作物の苗を持ち込む場合は寄生の有無を十分確認し、寄生苗は使用しない。
- (2) 高温・乾燥条件で多発しやすいので、施設内の温湿度管理に注意する。
- (3) 被害作物や収穫残さはほ場内に残さず処分する。
- (4) ナス科の雑草や観賞用植物（ペチュニア等）はほ場周辺から除去する。
- (5) トマトでは本種に対し現在登録のある薬剤はないが、ケルセン乳剤 1,500 倍、モレスタン水和剤 1,500 倍でハダニ類との併殺効果が期待できる。薬剤散布は株元や葉裏にもかかるよう丁寧に行う。



図：トマトサビダニ(♀)側面(全国農村教育協会「日本原色植物ダニ図鑑」より)